

沖縄本島中部及び 周辺離島の文化財

本島中部及び周辺離島





凡例

世界遺産

● 国指定史跡 ▲ 国指定名勝

● 県指定史跡 ▲ 県指定名勝

● 登録記念物

道路凡例

国道 幹道主要地方道 一般道 高速道路 市町村境界線

い は かい づか
伊波貝塚

国指定史跡

●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日



伊波貝塚は、伊波集落の南西方向にある標高約90mの琉球石灰岩丘陵崖下に立地しています。縄文時代後期の遺跡で、1904(明治37)年に鳥居龍蔵によって発見されました。鳥居はこの貝塚を「中頭郡美里間切石川村チヌヒンチャ貝塚」として報告しました。

鳥居が発掘調査をした後、1920(大正9)年には大山柏によってさらなる調査が行われています。

大山の調査では多量の土器や石器、貝製・骨製の装



身具類などがみつかっています。特にこの土地で出土した土器の中で、以下のような特徴があるものを伊波式土器と大山は名づけました。

伊波式土器は、この時代の代表的な土器です。この遺跡は早くから調査・研究が行われ、考古学史的・学術的に貴重な遺跡です。

伊波式土器の特徴

- ・口縁部(りべ)が朝顔のように開いている
- ・平底の深鉢形である
- ・口縁部の4カ所に山形の突起があって波状である
- ・口縁部から頸部にかけて先端が二叉になった道具を使って幾何学的文様が施されている

DATA

所在地：うるま市石川伊波座式次原

安慶名城跡

●指定年月日 / 1972(昭和47)年5月15日



安慶名城跡は、金武湾の南側に位置する*グスク時代の遺跡です。旧安慶名集落の東北を流れる天願川の側にある琉球石灰岩台地に築かれたグスクで、地元では天願川を大川と呼ぶことから、別名大川グスクとも呼ばれています。

城壁の石垣は自然の断崖と急傾斜を巧みに利用して築城され、南に開く城門は岩と岩の隙間の部分をうまく利用して自然の*アーチ門を形成しています。*内郭は山頂に位置し、そこに一の*郭と二の郭が配置されています。*外



DATA

所在地：うるま市宇安慶名集甲原



郭は、山の中腹から石垣が積み、内郭を守るように*輪郭式の城を形成しています。石垣の高さは内・外郭とも低い所で2 m、高い所で10 mに達します。発掘調査は行われていませんが、城内から14～15世紀の中国産*陶磁器やグスク土器等の破片が採集されています。

築城年代は不明ですが、伝承によると伊波城主の子が安慶名城を築き、この地域一帯を支配したといわれています。



伊波城跡

●指定年月日 / 1961(昭和36)年6月15日



伊波城跡は*グスク時代の遺跡で、伊波集落の南西側にある琉球石灰岩からなる標高約80mの崖端に築かれた*単郭式の城跡です。

東側は崖になっており、石垣を西側の台地に続く部分に野面積み(P56)の方法で菱形状に巡らしています。西側に2カ所、東側に1カ所石積みが途切れる所があり、門の跡だと考えられています。東北面は切り立った自然の断崖を利用し、南面は突き出た自然岩をうまく取り込み、

石垣を巡らしています。

城内には約500m²の平坦な場所があり、*火の神を祀った祠、森城嶽、今帰仁城への選拝所及び大東の拝所があります。また、グスク内外にはグスク系土器や中国産*陶磁器、*褐釉陶器等を包含する黒色土層の広がりもみられます。

築城年代は不明ですが、伝承によると怕尼芝*按司に滅ぼされた今帰仁グスクの城主の子孫がこの地に逃れてきて、後に力を得て伊波按司となって、ここにグスクを築いたといわれています。



DATA

所在地：うるま市石川伊波後原



仲原遺跡

●指定年月日／1986(昭和61)年8月16日



仲原遺跡は縄文時代晩期の*集落遺跡で、1978(昭和53)年に発見されました。

遺跡はうるま市の伊計島の中央部から、やや西寄りの標高約24mの平地に位置し、東西約200m、南北約100mの範囲に広がっています。

1979(昭和54)年に遺跡の範囲確認調査が行われ、1980(昭和55)年から2年間発掘調査が行われました。その結果、人の拳の大きさや頭程度の大きさの石灰岩で

縁取りされた*ふちど 竪穴住居跡、四角形や円形の石組の*たてあな 炉跡を有する竪穴住居跡、石灰岩の岩盤の上に粘土貼りの床面を有する住居跡などが検出され、これまでに知られていなかった縄文時代晩期の集落遺跡の規模や構成、住居跡の配置や構造などを具体的に把握することができました。

遺物は遺跡内から出土したものが多く、土器や*せきふ 石斧、*すり 磨石、*いし くぼみいし 凹石、*こつせいひん 骨製品、*サメ歯製品、*貝製品などがあります。

仲原遺跡は出土土器も含めて、学術的に価値が高く重要な遺跡です。また、土器は*なかばるしごと 仲原式土器の標式となる遺跡です。



DATA

所在地：うるま市与那城伊計

注意事項：遺跡は復元整備されたものです。





勝連城跡は、太平洋を望む勝連半島南風原ほえばるの標高約90mの小高い丘を取り囲むようにして築かれています。

12～13世紀頃に築かれたと考えられており、城は最高部から一の郭かく(くるわ)、二の郭、三の郭、四の郭と階段状に構成されています。調査の結果などから、それぞれの郭の特徴を見ていくと、一の郭には*アーチ門があったと伝えられており、二の郭には*殿舎跡でんしゃや「*火の神」ひのかんが祀られていることが確認されています。特に殿舎跡は、柱が多く礎石もといのあるしっかりした造りであったことから、城の中でも重要な建物であったと考えられています。他にも、三の郭からは、木製の扉であったと考えられる四脚門の跡や、2回以上の増改築がなされたと思われる城壁の石積み等が発見されていたり、一番下の郭である四の郭では、北東側に西原御門にしはるウヅウ、南西側に南風原御門ほえばるウヅウと呼ばれる門の跡なども確認されています。

また、城の南側に良港があることや、城跡から灰色の瓦や中国の*陶磁器とうじき、鉄器などが多く発掘されていることから、海外貿易で栄えたと考えられています。

勝連城は、有力な*按司あじであった阿麻和利あまわりの居城きよじょうとして知られています。沖縄の古い歌「おもろ」を集めた*『おもろさうし』には、阿麻和利によって勝連が繁栄した歌などが残されています。

2000(平成12)年12月には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。





宮舎跡



火の井

新しい話題

2016年9月には、城跡から3～4世紀のローマ帝国のコインが出土したと発表されました。これは、国内の遺跡からは初の事例で、14～15世紀の海上貿易を通じて流入したと考えられています。



DATA

所在地：うるま市勝運南風原赤吹原、同城之下他

開園時間：9:00～18:00

登録記念物

平敷屋製糖工場跡

●登録年月日 / 2015(平成27)年1月26日



国登録(遺跡関係)

平敷屋製糖工場跡は、勝連半島先端の南側の丘陵に立地しています。製糖工場とはサトウキビの搾り汁を煮詰め、それを結晶化させて砂糖を作る工場のことです。

平敷屋製糖工場跡は1940(昭和15)年に勝連平敷屋地域の11組の旧サターヤー組が合併して新設された、県内初の蒸気を動力に用いた製糖工場です。煙突はイギリス式に積まれた煉瓦造りで基部の平面が2.53mの正四角形で、高さは約16.3mの角錐台の形状を残して

います。貯水槽はコンクリート製で9.0m×10.5mの長方形で、深さは3.0mです。

去る大戦中の1944(昭和19)年に、米軍の攻撃を受けて煙突表面に銃痕が残っていますが、全体として保存状態は良好です。

同工場跡は近代沖縄の製糖業の歴史を知る上で、貴重な遺跡で、これまで平敷屋地区の自治会やうるま市がその保存に努めています。



DATA

所在地：うるま市勝連平敷屋



平安名貝塚

●指定年月日／1956(昭和31)年10月19日



平安名貝塚は縄文時代後期から晩期の複合遺跡で、1955(昭和30)年10月27日に多和田真淳によって発見されました。

遺跡は勝連半島平安名の南側に位置し、中城湾を一望する標高約40mの琉球石灰岩台地上に立地しています。

平安名貝塚から出土した土器の中で、*櫛目類似手法の文様を持つ土器を多和田が平安名式土器と名付けています。また、多和田が表面採集を行った遺物の中には、

荻堂式土器(P58)や*大山式土器、石製品、*骨製品、*貝製品なども見つかり、中でもイモガイ製の獣形垂飾(ネックレス)やトンボ状の文様を彫刻した貝符は注目されました。

この貝塚に隣接する南下の斜面地で遺物を多く包む層が見つかり、平安名貝塚と連続していると考えられており、このことから貝塚の範囲は海岸側に広がっていることが明らかになっています。



DATA

所在地：うるま市勝連平安名



座喜味城跡は、読谷村座喜味に、曲線の美しい城壁が2つの*郭かくを囲む形で築かれています。15世紀の初め頃、山田(恩納村)の*按司あじで、尚巴志の北山討伐にも参加した護佐丸ごさまるによって北山を監視するために築かれました。

沖縄本島のグスクが石灰岩の硬い岩盤の上に築かれていることが多いのに対し、座喜味城跡は赤土の上に築かれています。そのため、地面に溝を掘り込んで大きな石を詰めて固めた基礎で地盤を強化し、その上に石垣を築いています。また、アーチ式の城門は日本国内では見られず、中国から伝わったと考えられているほか、他のグスクでは見られない*クサビ石が使われていることから、最古の*アーチ門と考えられています。

城内には、政治の安定を願い、按司いげんの威厳を維持する守り神として「コバヅカサ神」、「マネヅカサ神」及び「城

内火神」などを祀った拝所が存在し、今なお多くの人々が参拝に訪れています。

沖縄戦などで城壁やアーチ門が部分的に破壊されましたが、1974(昭和49)～1983(昭和58)年に復元的な整備が行われました。その後、2000(平成12)年12月には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。

築城にまつわる伝承

山田(恩納村)の按司であった護佐丸が座喜味城を築く時、座喜味一帯では、城壁に用いる石が確保できなかったため、石垣にする石材を山田城(P28)の石垣を壊して確保したという伝承が残っています。また、山田城から座喜味城に石を運搬する際に取り落とした石が、多幸山たこうやまの山中に点々と残っていたといわれています。



三の郭の城門とカサド石



三の郭内から見た城壁



DATA

所在地：読谷村宇座喜味城原

県指定史跡

の くに そう かん はか

野国総管の墓

●指定年月日 / 1956(昭和31)年2月22日



沖縄に初めて甘藷（さつまいも）をもたらした野国総管の墓で、墓の前面には記念碑が建てられています。

墓は、海岸近くの琉球石灰岩中にある洞穴を利用して造られています。当初は洞穴をそのまま利用していましたが、1700（康熙39）年に*石厨子が造られ、遺骸を移したとされています。

野国総管は、尚寧王代に北谷*間切の野国村（現在の嘉手納町）に生まれ、総管というのは貿易船に乗り込ん

だときの役職名です。1605（万暦33）年に中国から甘藷の苗を鉢植えにして琉球に持ち帰り、自分の故郷野国村に移植したと伝えられています。その後甘藷は、儀間真常によって沖縄中に広められました。1704（宝永1）～1710（宝永7）年に薩摩の前田利右衛門によって甘藷の苗が薩摩に移植され、さらに1744（延享1）年に青木昆陽がこれを関東に広め、それから日本国中に広まりました。



DATA

所在地：嘉手納町字兼久下原

注意事項：嘉手納マリーナ地区内にありますが、日中は見学できません。



野国貝塚群

●指定年月日／1956(昭和31)年10月19日



野国貝塚群は縄文時代早・前期、後・晩期、弥生時代の複合遺跡です。遺跡は広域にわたっており、地点によって、出土遺物の性格が異なるためA・B・C地点と名づけられています。A・Cの地点は1955(昭和30)年に多和田真淳が発見した遺跡で、その後、高宮廣衛・高元政秀らによってB地点が発見されています。

遺跡は水釜集落の南端に位置し、国道58号沿いの海岸砂丘地から琉球石灰岩台地上に立地しています。現在、



DATA

所在地：嘉手納町字野国

注意事項：嘉手納マリーナ地区内にありますが、日中は見学できません。

遺跡の大部分が嘉手納マリーナ地区として、米軍人などの福利厚生施設となっています。

発見時の発掘調査で、A地点では貝層中から弥生時代の平底土器と唐の時代の貨銭「開元通宝」5点、C地点では縄文時代前期の伊波式土器(P42)や*大山式土器が発見されています。特に、A地点から「開元通宝」が初めて出土し、同地点の年代を推定するうえで、重要な手がかりになりました。またB地点では北端の排水溝一帯に位置し、沖縄で最も古い爪形文土器が発見されています。

調査の成果を基に、A・C地点は1956(昭和31)年10月19日に琉球政府指定埋蔵文化財となり、沖縄が日本に復帰した後に県指定の史跡となりました。

国指定史跡

い れい ばる い せき
伊礼原遺跡

●指定年月日 / 2010(平成22)年2月22日

国史跡



伊礼原遺跡は、縄文時代早～晩期、弥生時代、*ブスク時代の集落遺跡です。遺跡は東シナ海に面し、東側の丘陵を水源とするウーチヌカー（湧水）によって形成された標高約2mの低湿地区とその南側に広がる標高約4mの海浜の砂丘区に立地しています。特に、縄文前期から晩期の*遺構や遺物が注目されます。

低湿地区で流路に浅い掘り込みを設け、方言でパークと呼ばれる竹製の笊を敷いて四隅を杭で固定し、オキナ



DATA

所在地：北谷町宇伊平伊礼原



ワウラジロガシのどんぐりを貯蔵した縄文時代前期の遺構が確認されています。一方、砂丘区では縄文時代前期の*炉跡や建物跡の柱穴、1辺3mの隅丸方形の石敷住居跡、縄文時代中期の石組炉跡の遺構が確認されています。遺物はジュゴンの骨製腕輪、イノシシや*サメ歯製装身具などの他に、新潟県糸魚川産のヒスイ製の玉や西九州産の*黒曜石など、縄文時代の日本列島各地との交流を示す資料が発見されました。

伊礼原遺跡は、沖縄・奄美における縄文文化の生活様式の移り変わりや日本列島各地との交流を考える上で重要な遺跡です。



③骨を使った加工品



④低湿地区の発掘状況

(写真①～④：北谷町教育委員会提供)

沖縄本島中部及び周辺地域の文化財



なか くすく じょう あと

中城城跡

国指定史跡

県指定名勝

●世界遺産登録年月日／2000(平成12)12月2日 ●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日(史跡)

世界遺産

国史跡



中城城跡は、中城湾に面した標高167mの高台にあって、沖縄の城跡の中で最も*遺構が残っている城の一つです。城が築かれたのは15世紀前半頃と考えられています。

首里王府に対抗していた勝連城の阿麻和利をけん制するために、座喜味城主であった護佐丸が国王から移り住むように命じられたグスクで、琉球国の王権が安定化していく中で重要な役割を果たしました。しかし、1458(天順2)年に阿麻和利によって護佐丸が滅ぼされた後は城としての

機能はなくなり、*間切番所として使用されていました。

城は、六つの*郭からなる*連郭式の山城ですが、一の郭と二の郭は布積み、三の郭は相方積みになっています。城壁の石積みの手法が異なることから、中城城が創建後に何度か拡張されたと考えられており、築城の歴史を知る上でも重要です。特に、城門は大きな布積みでみごとな*アーチ門を築いています。これまでの発掘調査から、護佐丸が城主となる前からこの地にはグスクが存在し

コラム 石積みの移り変わり

石積みの技法は野面積み → 布積み → 相方積みへと発展した。



野面積み
自然のままの石を組み合わせて積む方法。



布積み
石を方形に加工し、一段ごとに、石を丁寧に積む方法。沖縄では豆腐積みとも言う。

県名勝

●指定年月日／1955(昭和30)年1月25日(名勝)

世界遺産

国史跡



ていたことが推定されます。しかし、文献では護佐丸以前の城主の正確な記録は見つかっていません。

なお、1853(道光3)年アメリカのペリーが琉球を訪れた時には、探検隊を派遣して中城城の調査を行い、その築城技術を高く評価し、城を描いた絵画や測量図面などを残しています。

2000(平成12)年12月には、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。



DATA

所在地：中城村、北中城村
 開園時間：1～4月、10～12月：8時30分～17時
 5月～9月：8時30分～18時
 定休日：年中無休
 利用料金：大人 400円 中・高生 300円 小学生 200円
 ※20名以上で団体割引適用

(2018年3月現在)



あいかたじ
・相方積み

石を五角形や六角形に加工して互いにかみ合うように積む方法。亀甲乱れ積みとも言う。

県名勝

荻堂貝塚

●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日



貝塚上(南側)



貝塚下(南側)

荻堂貝塚は標高約 135 m の琉球石灰岩台地の崖下斜面に立地する縄文時代後期の遺跡で、1904 (明治 37) 年に鳥居龍蔵によって発見されました。

1919 (大正 8) 年に、松村瞭によって発掘調査が行われ、翌年にその調査報告書「琉球荻堂貝塚」が刊行されました。これは沖縄で初めて行われた本格的な発掘調査で、報告書としても最初のものです。

地層の順序は上から表土・混貝土層 (土の中に貝が含



まれている地層)・基盤 (石灰岩) の3層からなり、第2層の混貝土層から海産の貝類とともに陸産の貝類であるシュリマイマイも多量に出土しました。その他にもイノシシやイヌ、ジュゴンなどの哺乳類をはじめ、魚類・カニ類などの動物遺体、土器や石器、貝器、骨器などの人工遺物が出土しています。この貝塚から出土した土器は「荻堂式土器」と命名され、壺形と深鉢形があります。特に、深鉢形土器は口縁部 (P15) に4つの小さな突起をもつ、底が平らな形をした土器で、口唇部 (P15) や口頸部に連点文や鋸歯状文 (ギザギザした文様) を組み合わせるなど、数種類の文様で飾られています。

DATA

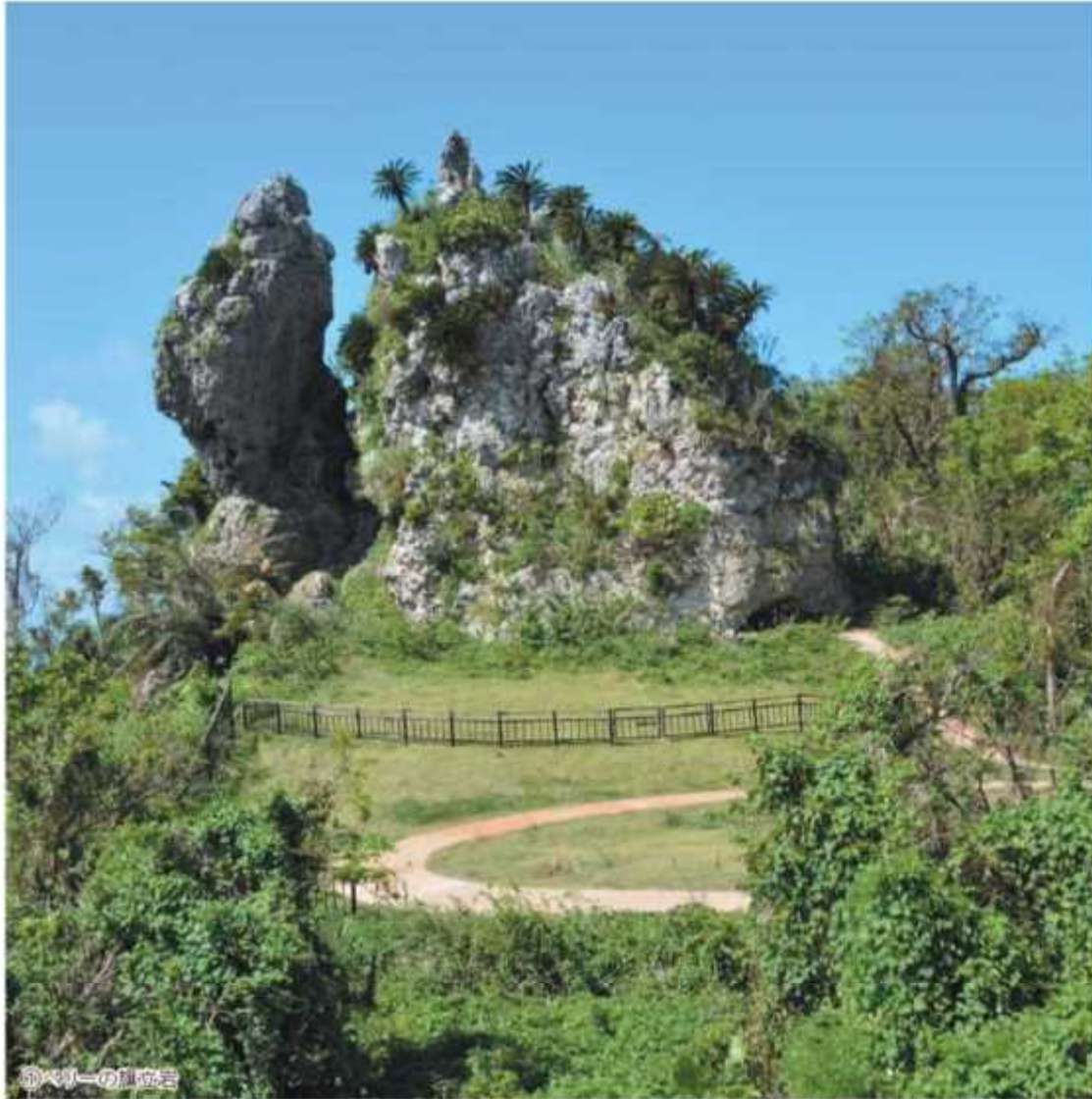
所在地：北中城村字荻堂後原

国指定史跡

なか くすく みち
中城ハンタ道

●指定年月日 / 2015(平成27)年3月10日

国史跡



(写真①～④: 中城村教育委員会提供)

中城村の台地部東端の嶺を利用して南北に通っている道筋があり、地元ではハンタ（端・崖の意）道と呼んでいます。首里城を起点とし、西原町の幸地グスクを經由し、中城村字南上原の東端にある糸カマノ嶽を北進します。北上原の「安里村壠里山」、キシマコノ嶽を経て新垣グスク、そして中城城へと至る 12km のグスク間、集落間を結ぶ道です。地誌書*「琉球国由来記」(1713年)には、琉球国を統一した尚巴志が、永楽年間(1403～1425年)に里制や*駅制を整備したことや、隔月に王府から各*間切へ伝令を通達するために早馬を東西の道に出したことが記されています。ハンタ道は 1671(康熙10)年の宜野湾間切の新設まで、首里城から西原間切、中城間切を結ぶ主要道として使用されていた古道と考えられています。



DATA

所在地: 中城村字新垣上原他



内間御殿(写真:西原町教育委員会提供)

石でできた壁の裏面(壁には刻まれる)

内間御殿は、琉球国第二尚氏の始祖、金丸(のちの尚円王)の旧宅跡に創建された神殿を中心とする祭祀施設です。

金丸は1454(景泰5)年、尚泰久王により西原^ま間^ま切内間村の領主に任じられ、1470(天順6)年に尚円王として即位するまでここに住んでいました。尚円王の没後、17世紀には第二尚氏ゆかりの地として旧宅跡の聖地化が進められ、18世紀前半には旧宅の竹垣が石垣に整備され、管理も強化されました。尚敬王撰文の碑文「先王旧

宅碑」が建立され、王自筆の扁額「致和」も掲げられ、琉球国の聖地として位置づけられました。

内間御殿は王府の祭祀との関わりがある一方、地元のウツンモリ御殿守により祭祀が継承されてきました。明治以降も地元の人びとの祭祀対象として尊崇され、沖縄戦で建物は被災したものの、地域住民の協力で再興されました。

このように内間御殿は国家的聖地として3世紀にわたり歴史的系譜を明確に辿ることができ、きわだった特徴をもつ史跡として指定されました。



DATA

所在地：西原町字裏手切



※拡大写真

沖縄戦で破壊された「先王旧宅碑」

大山貝塚

●指定年月日 / 1972(昭和47)年5月15日



大山貝塚は、西海岸の普天間川と大謝名川の間をほぼ南北に延びる標高約70mの琉球石灰岩の丘陵上にあります。縄文時代後期の遺跡で、1954(昭和29)年に多和田真淳によって発見されました。

大山貝塚の南側に美底森又は美底山御嶽と呼ばれる大山集落の拝所があり、拝所の周辺に数基の岩陰墓が残っており、遺跡の東側には隣接して米軍基地があります。

1958(昭和33)年に多和田真淳・賀川光夫が実施し

た発掘調査によると、貝層は約50cmで、貝塚内に堆積している黒色の土の中から土器や石器、*骨製品、*獣魚骨、貝殻などの自然遺物などが数多く出土しています。特に、この遺跡で見つかった深鉢形土器は*大山式土器と呼ばれ、貝塚の時期を決める際の一つの指標になっています。

このように、同貝塚の発掘調査は沖縄の考古学調査で*層位的に土器編年が行われ学史上貴重な遺跡です。



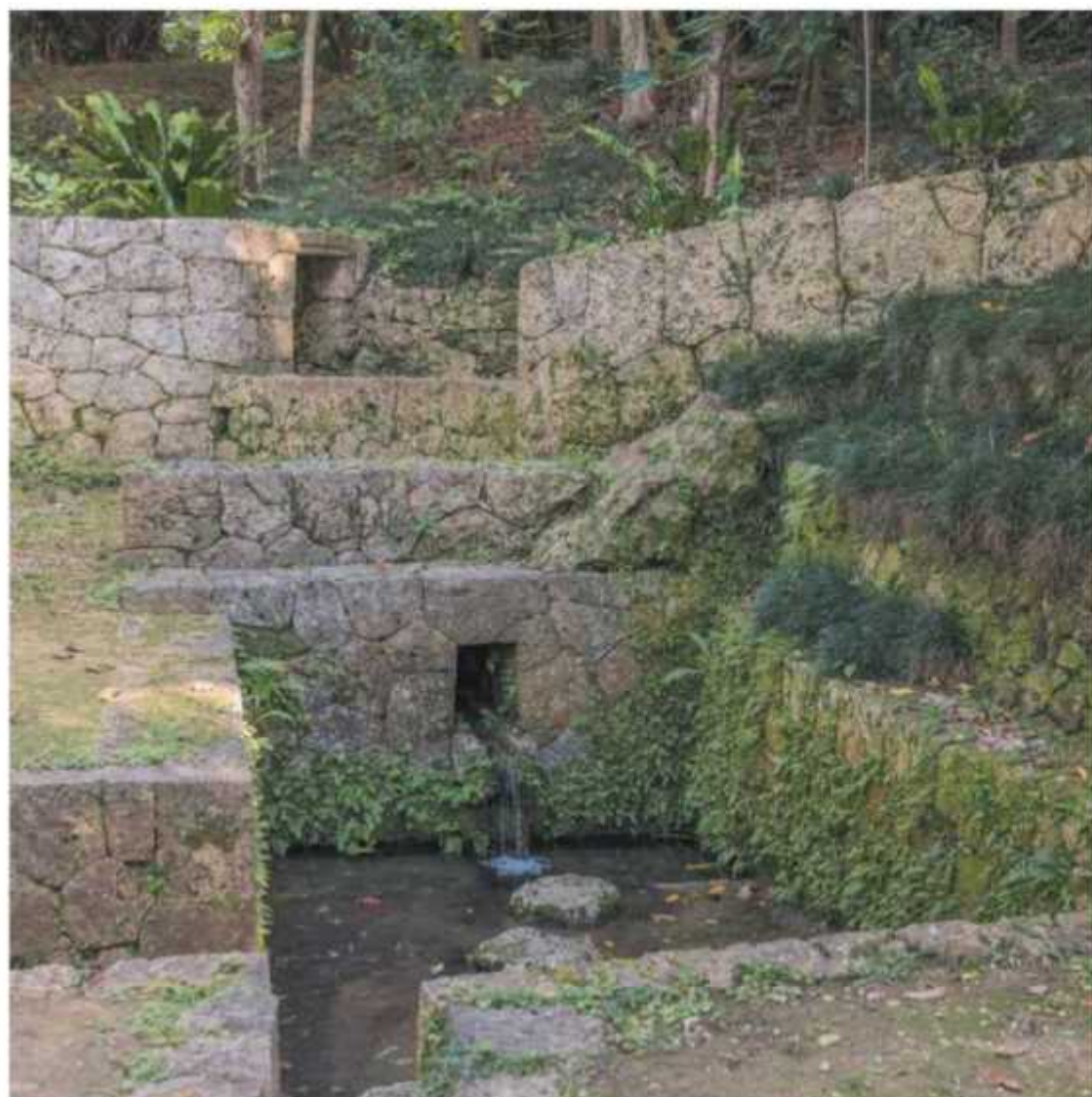
DATA

所在地：宜野湾市字大山盛盛原

ぎ の わん し もり がわ
宜野湾市森の川

県指定名勝

●指定年月日／1967(昭和42)年4月11日



宜野湾市森の川は、宜野湾市にある*井泉で、沖縄県内各地に残る羽衣伝説の舞台の一つとして知られる場所です。王府編集の説話集『遺老説伝』によると、「14世紀前半頃のある日、奥間大親なるものが畑仕事の帰りにこの泉に立ち寄ったところ、世にも稀な美女が一人沐浴をしていた。奥間大親は計略によって天女を妻にし、その間に生まれた男子は後に中山王となった。これが察度王である」と伝えられています。

泉の湧水口とその周辺は、布積みや相方積み (P56・57) によって築かれており、造られた年代は不明ですが、当時の石工技術の高さを知ることができます。泉の西隣には、謝名西森御嶽があり、そこは察度王統の始祖奥間家の屋敷跡と伝えられる場所もあります。また、中央部の拝所の裏側の洞窟は、先史時代の遺跡になっています。

森の川一帯は、かつて樹木が覆い茂っており、泉から湧き出る水の量も豊かでした。しかし、近年は周辺に住宅が建つようになって、泉周辺の環境が変わりつつあります。



DATA

所在地：宜野湾市真志喜



浦添城跡

●指定年月日 / 1989(平成1)年8月11日



浦添城跡は、*三山時代以前に栄えた城で、琉球石灰岩丘陵の標高 130 ~ 140 m の要害の地に築かれており、その規模は東西約 380 m、南北約 60 ~ 80 m に及びます。城跡からは「葵酉高麗瓦匠造」の銘の入った瓦や*フェンサ上層式土器、須恵器、青磁、白磁などが出土しています。城跡から出土した遺物や琉球の歴史書*「中山世鑑」や*「球陽」などの内容から舜天王統、英祖王統、察度王統のそれぞれの時代で中心地として栄え

ていました。英祖王の時、禅鑑という僧侶が沖縄に初めて仏教を伝え、城の北側に極楽寺を建てたといわれています。

また、北側の崖の中腹には、英祖王統の墓である「浦添ようどれ」があります。墓壁に向かって左側は 1609 (万暦 37) 年の薩摩侵入後、浦添城に屋敷を構えて移り住んだといわれる尚寧王の墓があります。



DATA

所在地：浦添市字仲間山川原

国指定史跡

中頭方西海道及び普天満参詣道

●指定年月日/2012(平成24)年9月19日

国史跡



①～③中頭方西海道(安波茶橋) ④～⑥普天満参詣道(当山の石畳道・当山橋)

中頭方西海道及び普天満参詣道は、ともに首里王府が幹線道路として整備したもので、現在も石畳道や*石缸(石橋)の*遺構が状態良く残っており、琉球国時代の交通の歴史を知る上で貴重です。

首里から本島西海岸の各*間切を結ぶ道を西海道と呼び、そのうち中頭地域を通る部分が中頭方西海道です。中頭方西海道の首里・浦添間は、尚寧王代の1597(万暦25)年に全て石敷の道となり、橋の改修、道幅の拡

張が行われました。このうち浦添市経塚と安波茶に挟まれた延長約187mの谷部には、石畳道及び小湾川に架かる2基の石造アーチ造りの安波茶橋、国王が赤い皿で水を飲んだという伝承を持つ赤皿ガーが現存します。

普天満参詣道は、中頭方西海道沿いの浦添*番所北側で分岐して普天満宮(宜野湾市)に向かう道筋で、17世紀中頃以降、国王の普天満宮参詣が恒例となったことから、整備されました。このうち浦添市「当山の石畳道」の部分(約210m)では、牧港川に架かる当山橋を挟み、幅約3mの石畳が状態良く残っています。



DATA

所在地：浦添市安波茶3丁目、経塚1丁目、当山1丁目他

県指定史跡

いそじょうせき
伊祖城跡

●指定年月日 / 1961(昭和36)年6月15日



城壁の一部



拝所の鳥居



碑所

伊祖城跡は、*グスク時代の遺跡で、伊祖集落の東北から、東西に延びる標高 50 ~ 70 m の琉球石灰岩の丘陵地に形成されています。城跡の南側は断崖絶壁をなし、北東部はゆるやかに傾斜しており、西側の丘の先端からは慶良間諸島を望むことができます。

伝説によれば、天孫氏の子孫と称する英祖王の生まれた所だといわれています。英祖王は、源為朝の遺子と称される舜天の孫にあたる義本王から位を譲り受けて 1260

年に即位し、元の襲来を退け、久米島や慶良間島、伊平屋島などを入貢させた琉球史上の英雄とされています。

城跡の石垣は、東北の方角にある城門の下から一の郭付近までは布積み (P56) で、他は野面積み (P56) です。城の面積は約 5,000m² で「うらおそいのおもろ」にも謡われている石垣のある城の中では古いものと思われます。

本格的な発掘調査は実施されていませんが、表面からグスク系土器やカムイヤキ、中国産*陶磁器などの遺物が採集されています。



DATA

所在地：浦添市宇伊祖後原



石の層状

浦添貝塚

●指定年月日／1972(昭和47)年2月25日



浦添貝塚は縄文時代後期の遺跡で、1959(昭和34)年に高元政秀によって発見されています。牧港から前田方向に伸びている琉球石灰岩丘陵北側の切り立った崖下、標高約70m前後に立地しています。

崖下に厚く堆積した遺物を含んだ黒色の土の中から、主に南九州で出土する市来式土器や、奄美諸島から出土する爪形文土器や刺突文土器、沈線文土器などの宇宿下層式土器が主に出土する貝塚で、主として奄美系土器が

出土する貝塚は現在、県内では浦添貝塚のみです。土器以外に*貝製品や*骨製品、石器、貝殻や魚骨などの自然遺物が出土しています。貝製品には中国大陸の青銅器文化と接触があったと考えられる貝符や貝鏃なども発見され、骨製品には腕輪やサメ歯の垂飾(ネックレス)などが出土しています。当時の周辺地域との文化的交流を知る上で、沖縄で数少ない重要な遺跡の一つです。

また、1971(昭和46)年に国道330号の建設に伴い取り崩されそうになりましたが、保存運動の成果によって貝塚の下にトンネルを通すことで保護されています。



市来式土器
(写真：沖縄県立博物館・美術館提供)



DATA

所在地：浦添市宇伊祖真久原